

第1部会

scu)の参謀役であったブルトゥス・コステ (Brutus Coste, 一九一〇—一九八四)らと協力することによって、亡命ルーマニア人組織の設立と運営に尽力し、それらの機関誌に論考や小説を掲載していた。エリアーデとコステの往復書簡からは、パリに亡命していたルーマニア人たちの間には、様々な政治的、経済的利害関係に基づく対立があったことが確認できる。そのような状況に対してエリアーデは、亡命ルーマニア人たちが政治的、経済的利害関係を超越して団結することで、社会主義政権によって破壊されていく祖国の伝統文化を存続させるための文化活動を展開する必要性を訴えていた。エリアーデは『ルーマニア同盟』に一九五〇年一月二月に掲載された「絶望に抗して」において以下のように述べている。「深刻かつ重大であるのは、懐疑や不信、恨みといった雰囲気次第に亡命者全体に広がりつつあるという事実である。我々各々の義務は、我々の精神的統一性を脅かす雰囲気に対して闘いを挑むことなのである。(中略)我々が身を置いている鉄のカーテンのこちら側での歴史的状况においては、我々にできることはただ一つ、文化のみである。実際、文化こそが我々の担っている唯一の責務なのだ。すなわち可能な限り、ルーマニアの文化的創造の継続性を救い出すということである」(Ibid., pp. 65-66)。この引用文からは、ルーマニア文化の存続をかけた文化的闘争に参加するために、「スピリットな価値」を意識のうちに見出すことで同胞間の政治的対立を乗り越えていくことが亡命者にとっての最重要の課題であるというエリアーデの信条が確認できる。そしてエリアーデは、ルーマニア民族のスピリットな価値はマノ

ーレ親方伝説」(Balada Meșterului Manole)や「ミオリツァ」(Miorița)といったルーマニアの代表的フォークロアから析出できると述べている。

これらの亡命ルーマニア人組織の機関誌に掲載されたエリアーデの原稿を読解すると、エリアーデは、個々の亡命ルーマニア人たちが抱えていた多種多様な政治的信条や経済的状况を超越してそれらを包み込む文化共同体を創造するための共通価値を提示するために、政治や経済的要因には還元不可能なスピリットをフォークロアや神話から析出しようとしたのだと考えられるのではないであろうか。確かに、エリアーデの非還元主義的宗教概念は「宗教」を他の文化的要因から切り離して特権化する規範性や普遍的志向を有している。しかしその規範性や普遍的志向は、信条や利害の対立を包み込むルーマニア民族固有の文化的価値を創造するという目的を実現するために、エリアーデが意図的にとった立場であるとも考えられるのではないだろうか。

宗教における思考と感謝

浅野 章

はじめに

「思想としての宗教」は、今学会のテーマとみてよいと思う。思考なくして思想はない。思考と宗教のかかわりが問われる。感謝は日常的普遍的に認められるが、体験の深化は宗教的様相

を帯びてくる。事実、宗教と感謝は深くかかわっている。感謝の多様性に触れつつ、宗教における思考と感謝について考えてみたい。

一 「なされたことを知る」—恩の思想—

感謝についての研究はあまり聞くことはないが、恩の思想については、関連する文献は少なくない。感謝し感謝されるのは恩の故である。しかし、現代用語として感謝に比べ、「恩」を目にし耳にする機会は少ない。恩の思想の豊かさは、感恩・知恩、に始まり、謝恩・報恩、さらに、忘恩から棄恩、に至るまで、多様である。恩の語源の一つに、「なされたことを知る」という、サンスクリット語、パーリー語があると言う（中村元編『恩』）。この意味するところは深い。自覚的であり他覚的である。

二 「謝恩の一念発起すべきや否や」

この問題を提起したのは、福澤諭吉（一八三五—一九〇一）である。啓蒙思想家である福澤は、自らの信仰としての宗教を認めなかった。また、感謝について独自の見解を持ち、謝恩の一念発起を否定したが、先人辛苦の恩賜の報恩として子孫を裨益する義務を説いた。

三 感謝と羨望

感謝の定義は「愛の感情から親切をなした人に報いようとする愛の情熱である」（スピノザ『エチカ』第三部）。なお、「足るを知る」ことも感謝には不可欠である。満足と不満、心性における機序をメラニー・クライン（一八八二—一九六〇）は明らかにしようとした。

四 犠牲と感謝

感謝の念は単に承認あるいは足るを知ると言う肯定のみではなく、否定によって深化される。犠牲はその典型である。ここに感謝は宗教的となる。犠牲において隠された感謝が生起する（ハイデガー『形而上学とは何か』後語）。

五 恩恵—現代における恩の思想—

ルース・ベネディクト（一八八七—一九四八）とK・S・シユレーダー・フレチエットによって恩の思想が注目されている。取りあげ方は異なるが、歴史的背景の相違を思わせる。環境問題における恩の思想の適用であり、日本の思想の国際的関心の例でもある。

六 宗教における感謝と思考

1 感謝≡思考

感謝と思考は深くかかわっている。これをドイツ語の原初的な語「思想」(Gedanke)を手がかりに、マルティン・ハイデガー（一八八九—一九七六）は論考している（『思惟とは何の謂いか』）。感謝は、自覚態他覚態において極小極大であり、思考と相即的に深化する。

2 思考の根底あるいは超越としての感謝

波多野精一（一八七七—一九五〇）は、『宗教哲学』の終章「時と永遠」において、神聖なるものとの関係は、多分「感謝」と名づけ得るものであろう、と、感慨深く結んでいる。

むすび

思考と感謝を多面的に見るとともに宗教とのかかわりについて述べた。